

■平成二十七年七月 孟蘭盆施食法会 雲昌寺にて

相 承

善光寺住職 黒田博志

今日は「相承（そうじょう）」という言葉でテーマにしてお話をさせて頂きます。

「仏さまの教えを師から弟子へ、絶えることなく受け継ぎ、伝えていくこと」。今年、大本山總持寺では二世・峨山がざん韶じょう碩せき禪師の六五〇回忌大遠忌の年となります。この大遠忌のテーマが「相承・SOJO」大いなる足音がきこえますかー」でございます。

峨山禪師は一二七六年に現在の石川県能登でお生まれになられて、一三六六年に九十一歳でお亡くなりになられたお方でございます。

禪師さまは四十二年間、總持寺の住職を勤め、曹洞宗の教えを全国に展開する基盤を形成されたお方です。曹洞宗では「一佛両祖」といい、正面にご本尊であるお釈迦さまをお祀りし、向かって右側に福井県にある永平寺を開かれた道元さま、向かって左側に鶴見にある總持寺を開かれた瑩山さまをお祀りする形が基本となります。峨山禪師さまはその總持寺を開かれた瑩山さまのお弟子となります。

總持寺の朝のお勤めでは「大悲真読」といい



まして、これからの法要で読むお経、『大悲心陀羅尼』をものすごくゆっくり読む読経法でございませう。

これは峨山禪師が能登の總持寺と羽咋はくにある永光寺の住職をしていたころ毎朝未明に永光寺の朝のお勤めをしてから、十三里・五十二キロを走り抜けて總持寺の朝のお勤めに駆けつけたという伝承にもとづき總持寺では毎朝ゆっくりにとお勤めされております。

今年はお釈迦さまがお生まれになられてから数えますと、二千五百八十一年となります。今年は二〇一五年ですので紀元前五〇〇年ごろになります。とても永い永い歳月です。この間、師匠から弟子へ、またその弟子も今度は師匠となり弟子へ、そして更に次の弟子へと脈々と受け継がれて今ここに「仏道」がございませう。

お釈迦さまから弟子の摩訶迦葉さまへの相承を一とすると、達磨さまが二十八代、道元さま

が五十一代、瑩山さまが五十四代、峨山さまが五十五代、私の師匠が七十九代、私が八十代となります。

皆様方は、お葬儀の際や生前に方丈さまより仏さまの証であるお戒名をいただきますね。これも相承です。お釈迦さまの教えを受け継ぐ儀式です。曹洞宗の毎朝のお勤めでは、お釈迦さまより自分の師匠までのお名前を順々にお唱えさせて頂いております。

脈々と相承されてきた教え、曹洞宗では道元さまの教えを具現しておりますが、「日常の生活すべてが修行である」とお示しになられております。

坐禅、読経はもちろんの事、食事をいただく時も、洗面も、入浴も、寝る事でさえも修行です。二十四時間すべてが修行でございます。ですので修行とは「行いを修める」と書きます。

行いを調えることによつて、自然と心が調います。心だけを調えるというのは出来ません。心は常にコロコロ変化します。ですので、行いを調えることにより心を調えるのです。

私たち曹洞宗の根本は坐禅です。その坐禅がそうなのです。坐禅に大事なことが三つあります。調身・調息・調心です。

まず、姿勢を調え、形を調えます。姿勢が調いますと自然と呼吸が調います。呼吸が調いますと自然と心が調います。

脈々と相承されてきた教えを「行持る」ことにより、お釈迦さま、達磨さま、道元さま、瑩山さま、峨山さま、祖師方のお心を感じる事が出来ますし、いつまでも生き続けていきます。

昨年、テレビを観ていてとても心を動かされたお話がございました。ご存知の方も大勢いらっしゃると思います。「二十四時間テレビ」で



ドラマ化されたお話『はなちゃんのみそ汁』です。本も買って読みました。

このお話は、お母さんが癌を患い、癌と闘いながら幼い娘に自分が居なくなってもひとり生きていけるように何を伝え、何を残していくべきか、日々の暮らしの中で教え伝えていくお話です。

お母さんは、闘病生活の中で「食」の大切さに気づかれます。

そのきっかけは二度目の癌再発です。娘を出産して約九ヶ月。幸せの絶頂から一転、再び癌との闘いが始まります。

主治医より「病気になるということは、生き方そのものに原因があるのです」と言われ、人間の持つている自然治癒力を高めるために、食事療法と規則正しい生活を始めます。

朝は六時におき、夜は十時には寝る。夕食は午後六時ごろからゆっくり食べ始め、午後八時



ドラマ化されたお話『はなちゃんのみそ汁』です。本も買って読みました。

このお話は、お母さんが癌を患い、癌と闘いながら幼い娘に自分が居なくなってもひとり生きていけるように何を伝え、何を残していくべきか、日々の暮らしの中で教え伝えていくお話です。

お母さんは、闘病生活の中で「食」の大切さに気づかれます。

そのきっかけは二度目の癌再発です。娘を出産して約九ヶ月。幸せの絶頂から一転、再び癌との闘いが始まります。

主治医より「病気になるということは、生き方そのものに原因があるのです」と言われ、人間の持つている自然治癒力を高めるために、食事療法と規則正しい生活を始めます。

朝は六時におき、夜は十時には寝る。夕食は午後六時ごろからゆっくり食べ始め、午後八時

以降は食べ物を口に入れない……など。教えられたことを一生懸命に勤めていきます。

辛い闘病生活から十ヶ月。奇跡が起こりました。痛が消えたのです。これをきっかけに「食」の大切さに気づかされます。

「食べることは生きること」をモットーに日常の生活を始めます。しかしそれから二年後、再び再発。今度は全身に転移しており医師より余命宣告を受けます。

幼い娘がひとりでも生きていけるように何を伝えるべきか？ お母さんはまず、娘の四歳の誕生日にエプロンをプレゼントします。

洗濯物干し、洗濯物たたみ、お風呂洗い、靴並べ、掃除、保育園の準備、タンス整理、自分の服の管理、そして配膳、料理……。

一人残される娘が、これから自分でやらなければならぬことを考え、一生懸命に伝えていきました。しかし全身転移が分かってから二年

後、三十三歳の若さで他界されました。

お母さんが亡くなられて一ヶ月が過ぎたある朝。まだまだ悲しみのいえない中で、五歳のはなちゃんはお父さんのために、台所に立ち、慣れた手つきでみそ汁を作ります。

料理だけでなく、お風呂掃除も玄関の靴そろえ、洗濯物たたみ、自分の洋服の管理、保育園の準備もお母さんに教えてもらったことを五歳のはなちゃんはしっかりと務めていました。お母さんの思いが、ここにしっかりと受け継がれておりました。

はなちゃんがお母さんから教えてもらったご飯やみそ汁を作ることや、お母さんの心を受け継ぐことにより今は亡きお母さんはいつまでもご家族と一緒に生き続けていくのだと強く感じました。

これからお盆でございます。皆さまの大事な



仏さまが自宅にお帰りになるお盆です。

おじいさん、おばあさん、お父さん、お母さん、ご主人さま、奥さま、お子さま或いはお孫さま方がお帰りになります。

皆さまの大事な方々から教えて頂いたこと、また趣味であったり、特技であったり、その方のくせや考え方など、ご家族の皆さままで思い出し、また語り合って頂くことがなによりも供養となります。

私も日々師父を思います。

とてもやさしく、穏やかな父でした。師匠と弟子ということも有りとても厳しい面もございました。よく叱っていただきました。

「博志、真面目にやれよ。真面目に務めなければダメだぞ」。

どうぞお互いさま、仏さまのおこころを受け継いでよいお盆を過ごして参りましょう。